

自己変容の一考察
～ 対人援助職における気づきの深まり～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
橋本 俊之

本研究では、対人援助職が、どのようにして自己確立されるのだろうかを具体的に考察していきたい。これが研究の目的である。東洋人である日本人の「耐性」と「自立的共感」は、身体を通じた洞察による対人関係やコミュニケーションにより構成されてきた。しかし、近代以後、西洋の知的、論理的を中心とする思考の流入により、徐々に失われつつある。対人援助職の学びについても、ほとんどが西洋からやってくるものばかりではないか。西洋からやってきた知的、論理的な思考による学びが圧倒的になっている。このような混沌とした現代社会により、多くの対人援助職を社会が渴望し、大学、大学院をはじめとした養成機関にて訓練を受けて、資格を取得し、現場に携わっている状況がある。そのような対人援助職の多くは、西洋からきた知的、論理的な思考により圧倒的に影響されている。そこには、東洋による身体を通じた洞察による自己確立の要素はほとんどみられないのではないだろうか。現実的に、対人援助職の資格取得の条件ではないため、自己確立の必要性がないまま、現場に従事している。現場にて、忙しい日常を経験しながら、自発的に自己確立していくことを対人援助職は期待するけれども、現実にはますます知的、論理的な思考に傾倒し、自己を確立する機会が存在しない場合が多いと思われる。自己を確立する方法として、修行に注目する。自己と向き合い、「耐性」と「自立的共感」を得るため、潜在的に持っている人間性を育むために、一所懸命に修行をするのである。そして、修行のなかであるき遍路（四国遍路をあるくこと）に注目する。その理由について、対人援助職の自己確立のための修行として、現実的、具体的に有効であると考えからである。あるき遍路は継続的な修行である。日本人である対人援助職が、環境の変化によって多くを失ってしまった感覚を取り戻し、「耐性」と「自立的共感」を、身体によって育み、自己確立を促していくのである。本研究では、あるき遍路による修行において、私自身の一人称による身体感覚を通じて気づいていくものに対して、意識、感情、言葉に分類し、その気づきの変化を具体的に考察する。対人援助職にとって、対象に対してどのように伝えることが有効であるのかを考えてみることで、本研究の最初の目的あり、対人援助職が修行の実践において、共感と耐性を育み、自己確立することで可能と考察される。つまり、自己確立することにより、「耐性」を育んだ対人援助職が、対象とかがかわることにより、「自立的共感」が自ら生まれるのである。